

①はじめに

二日間にわたり自らの安全と生活を自律して維持することに、OMMの精神があります。これは、自然の中で自らの進路を決めてフィニッシュを目指すナビゲーションスポーツだからです。プログラムの「安全の確保」の項目に、「大会主催者は競技者が2日を通じて競技ルールに則り行動すれば自らで対応可能なコースを設定しています」とあります。主催者と参加者が共同して自然の中のリスクに挑戦する。そこにOMMにおける安全管理の基本的な考え方もあります。

安全管理セクションでは大会の理念の元に、リスクマネジメントとイベント中のトラブル・事故等への対応を行ってきました。主催者はイベントのリスクを一定程度コントロールします。一方で、皆さんが競技規則や必須装備を文字通りに読み取るだけでなく、その背後にある考え方を理解していただく必要もあります。日本で開催が3回目となった本大会では、大会の理念とともに、自らリスクをマネジメントすることがイベントの魅力でもあることが受け入れられつつあることを感じました。

②安全面についてのレースの概況

イベントは二日間好天に恵まれ、気温もこの時期・地域としては例外的に高い絶好のコンディションに恵まれました。このため、事故やトラブルはほとんど見られず、イベント後の救護所の利用もほとんどありませんでした。また捜索活動の対象もありませんでした。山の常識に従った参加者の判断と行動によって競技が無事終了したことを、皆さんとともに喜びたいと思います。

一方で、安全面での競技規則からの逸脱も散見されました。その多くは、競技中の紛失ですが、地図、携帯電話、テント(!)の不携帯がありました。スタートした時は持っていたとしても、競技中必須装備をなくしてしまえば、確保されるはずの安全が損なわれます。また、チームの分離とピストンになるポイントでの荷物のデポもそれぞれ1件ありました。いずれも短い距離かもしれませんが、しかし、必須装備を持つこと、二人一組の競技であること、がリスクをコントロールする上でどのような役割を果たしているかを今一度ご確認ください。これらのチームについては、主催者として残念なことではありますが、競技規則に則り失格と致しました。

競技の公正のため、フィニッシュ後の装備チェックを行いました。装備についての工夫を見ることは、安全管理セクションとしても参考になりますし、楽しいものでした。昨年も「異次元の軽さ」で評判となったチームは、今年もさらなる工夫を見せてくれました。その一方で、上位に入ったチームの中でも、「あと二日はレースできますよ」という重量チームもありました。重要なことは、それぞれの豊富な自然の中での経験とトライアルのもとに、自らの安全を守るためのポリシーと着実な手順によって装備を選んでいるということです。ミニマリストとマキシマリストという対極にあるように見えて、その共通の考え方には学ぶべきものがあります。

安全には直接影響ない事項ですが、地図上の立入禁止エリアへの進入も見られました。地図上の表記が見にくい耕作地・民家のエリアではありましたが、地図の表記を正確に理解し、適切に行動することもナビゲーションスポーツでは必須のスキルです。主催者としても、立入禁止の表記については今後も検討しますが、参加者自身の注意もお願いします。

③安全上の課題

クマの遭遇事例が報告されています。近年里山にクマが降りてくるという報道を耳にされる方も多いことでしょう。またここ1~2年は、人への危害の事例が本州でも報告されています。今後、動物の襲撃に関するリスク対応は重要な検討事項になると考えています。

もう一点、フィニッシュ時に確実にSIの読み取りを行うことを再度お願いします。プログラムには、参加者の帰還確認はSIチップの記録によって行うこと、それがなされない場合、未帰還者として捜索対象になる可能性が記載されています。主催者は、未帰還の参加者チームがいた場合、最優先でその捜索を行います。実際には帰還しているにも関わらず捜索が行われれば、捜索隊をリスクに晒すだけでなく、

社会的にも問題を生じさせる可能性があります。SIチップによる未帰還者の確認は、全チームが確実に読み取りを行うことによって有効に機能します。

④事後のヒアリング

アウトドアスポーツといえども、社会の中で行われます。そこでも通用するリスクマネジメント体制を構築するにあたり、レース後、一部のチームに大会のリスクマネジメントについてのヒアリングを行いました。「大会の適切なリスクマネジメントは主催者と参加者の協働によって初めて成し遂げられる」という安全管理の理念をより多くの人に知っていただくためです。大会でのリスクは適切にコントロールされていたというご意見とともに、多くの方には、本大会の安全管理が過剰でも過小でもないものだと感じられていたようです。

参加者のレベルが様々だという感想も聞かれました。しっかり地図読みができるチームはよいが、そうでないと厳しい部分があるのではないかというご意見、あるいはOMMライトがあることで参加者が適切にステップアップできる仕組みになっているのではないかというご意見もありました。今回は、天候がよかったが、中途半端な予報の時には、怖いという意見には同感です。

必須装備については、「用語にわかりにくいものがある（インサレ-ション等）がありました。「予備の」「1日分の予備食」という表現をどう捉えたらいいのかという質問もありました。予備とはただ別に一着持っているだけでなく、遭難等の環境下でも着替えができる、つまり濡れていないウェアを最後まで持っていると解釈したというチームもありました。必須装備の扱いについては主催者としても毎年頭を悩ませているところです。詳細に書けば明確にはなるが、リストの仕様を守ることだけに注意が向いてしまう危険性もあります。曖昧さがある中で、参加者自身が「競技の精神に照らしてこれはどう解釈することが適切なのか」を考えていただくことも重要だと、安全管理担当としては考えています。

⑤おしまいに

海外に遠征することが夢ですらない16歳の少年時代にOMM(当時は別名称でした)を知って以来、OMMは「カッコいい」競技だと思っていました。出場のみならず、それに運営者として関わっている今、その思いはさらに強くなっています。そう思わせるのは、「参加者の自立と自律」に尽きると思います。とすればOMMの格好良さは主催者ではなく、参加者の皆さんが作り出しているのです。来年のOMMではますます格好良くなった皆さんにお会いしたいと思います。

OMM JAPAN 安全管理マネージャー

村越 真